昭和42年2月24日国鉄東局特別扱承認新聞紙第490号
昭和40年3月8日第三種郵便物認可（毎月5日、15日、25日発行）

☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆プロレタリア世界革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！
共産主義者同盟

7月15日
第139号
編集発行人　杉村宗一
一部　20円
購読料　20回　40回
1部400円　800円
2部700円1400円
3部以上300円600円
（1部に付）

戦旗

1968年7月15日　第139号

戦旗社
東京都千代田区神田鍛冶町2—8
電話代表（292）0849
振替（東京）28110
大阪支局
大阪市福島区鷺洲木通り1—16北村ビル内06（451）6597
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128—28 電（71）0025
名古屋支局052（732）3553

■7月16日／麻布米軍ヘリポート撤去闘争
（午後6時・六本木三河台公園）
■7月17日／社学同全国政治集会
（午後6時・新宿文化会館）
■7月19日、20日／全学連大会
（午前10時・中大大講堂、午前10時・東大安田講堂）
■7月26日／三木訪豪阻止中央決起集会
（午後8時、日比谷公会堂。キューバ革命十周年記念集会／午後6時、同所）
■7月27日／三木訪豪阻止羽田実力闘争
■8月3日／国際反戦集会
（午後1時、中大大講堂）

プロレタリア国際主義の下　全学連の革命的再編をかちとり

7・27三木訪豪阻止、8・3国際集会へ！

日帝のアジア侵略反革命＝ASPAC粉砕

反戦全学連の総力で羽田実力阻止!!

七〇年安保闘争の決定的飛躍の時期が到来しつつある。それは、7・27ASPAC粉砕三木訪豪阻止闘争と八月『国際反戦集会』であり、この二つの闘いをもって、七〇年闘争の質的転換、日帝打倒の基軸を国際階級闘争の中にうちたてることにある。

参議選後の自民党反動政治の開始

七〇年安保を目前にひかえた参議選挙において人気候補等あらゆる別動隊を駆使し、かつ大企業ぐるみの票集めを展開した自民党は保守票防衛・動員に成功した。それは結果として政府、自民のこの間の議会的敗北・腐敗を消去することとなり、これをもって佐藤三選—訪米の話題とし、さらに七〇年安保に臨む政治委員会形成と強権的路線の飛躍点としようとしている。

「自動延長」安保の方針のもとに展望これを保証し、実現する態勢の強化が七月から来年秋の支配者階級の攻撃の基軸を形成するものとなるであろう。はやくも灘尾文相は全国の大学「騒動」にたいし、夏休み中にもこれを鎮圧せよとの指令を発した。

だが、他方で全国的に下からまきおこりつつある実力闘争は社民の議会的敗北をこえた指導性をさし示すものとなった。この闘いは四月以降の一定の反動と、反戦的運動のホブル平和主義化、米帝退却敗への歪曲を克服しつつ、七〇年安保粉砕闘争の実態をめざしている。「反戦反安保」一般の闘争からの戦闘的・革命的転換はいうまでもなく、わが同盟・社学同の全力闘争を原動力としてかちとられてきたものであった。

「参戦国化阻止」や「沖縄奪還」（中核派）という社民左派的路線によってでなく、日帝総路線対決の路線と戦術こそ、この闘いをひきあげ、戦闘性をうちかためてきたものである。日本支配者階級が米帝との協調・同盟関係にあればこそ、この総路線からの政治的孤立を闘いのなかにうちたて、闘争主体をきたえての革命的方向性を鮮明にすることが、まずまず必要になる。「日米同盟の地体をつかめ」（「前進」）などという総括は政治的俗論に陥らざるをえないであろう。

アジア総支配人の地位をねらう日帝

七〇年安保はいうまでもなく全世界的激動の焦点となりつつある階級闘争である。二つの羽田において、さらに佐世保闘争で端緒的に示されたこの闘争の国民的な規模は現実に帝国主義的軍事基地・生産・輸送の大幅な再編強化に対する直接的実力闘争の性格によって急速に階級的性格を前面化している。

アジア太平洋会議（ASPAC）はわれわれがこれまで紙上で暴露してきたように、侵略反革命会議として、この七〇年態勢の主要な環となっている。政府・自民党によるASPACの性格の隠蔽にもかかわらず、侵略反革命連帯強化こそこの政治的目標なのであることは明らかで、七〇年安保のアジア的規模における協力会議にほかならない。このかぎりにおいて、ASPAC闘争はたんに「政府自民党の政策だからわるいにきまっている。反対だ」という一般論（中核派）によっては把握しえぬところの、七〇年態勢の帝国主義的外交の環を粉砕する主要な闘いである。

七〇年安保の環　沖縄・ASPAC

そはれからでない。われわれはASPAC闘争をその内容において考えるとき、この闘いは沖縄闘争と密接不可分の関連をもって提起されること、それ故にわれわれの闘いのスローガンは、沖縄返還阻止・ASPAC粉砕でなければならない。

「核つき沖縄返還」を日帝政治委員会が一歩の妥協もなく主張しなければならぬように、アジア戦略軍事基地における沖縄（核）の反革命的位置は明らかである。ASPACの政治的軍事的成果は主要にかかる問題に集約される以上、七〇年安保との具体的内実たる沖縄問題をアジア的規模での反革命侵略会議＝ASPACの内実として徹底的に暴露し、かつまた沖縄の帝国主義的基地の強化発動を暴露し、かつ七〇年体制としての再編支配を許さぬものとしてもASPAC阻止闘争の意義を確認しなければならない。このかぎりで七〇年安保闘争におけるASPAC闘争の階級的意義はきわめて重大なものであり、この闘いと国際反戦集会によってきりひらくべき展望の革命的な意義は、七〇年安保を日帝打倒へとひきつぐ政治的導火線としてのものである。

自然発生的戦闘性と革命的指導の質

国際的な局面の政治的性格は米帝一元支配の動揺—再編期におけるあらたな国家形態への激動期の集約を求める過渡的策動として規定される。かかる局面の革命的階級の指導力たよった集約こそ国際的階級闘争において等質的に問われる課題にほかならない。

そして、この任務は大衆的実践における目的意識性としてプロレタリア政治を代表し、組織論的にもプロレタリア独裁にいたる強固な統一戦線の形成の基礎としてきわめて重要である。のみならずかかる意識が真に革命的実践を実現しうるためには、国際主義の現実的意味をプロレタリアートのあらたな国際的指導部の建設を意図した理論によって支えられねばならない。われわれはこの任務がはじめにのべたように、国際的局面の政治的性格の等質性によって基礎ずけられ、とくに日本労働者・人民・学生によって展開される沖縄—ASPAC闘争の意識的任務として具体化される綱領を切りひらくことを主張する。

明らかにうみだされるべき国際的階級の有機的連携はただ一面的階級闘争の綱領から疎外されるものではない以上、沖縄—ASPAC闘争はむしろ国際的反戦闘争の部分として位置している。だがわれわれが七〇年安保の現局面をかかる沖縄—ASPAC闘争によって安保粉砕から日帝打倒へと真にひきつがれるべき階級的ヘゲモニーを日帝総路線対決闘争として大胆な闘いの力として大衆的に提示しかつまたこの闘いを七〇年国際的階級危機のなかに位置づけておりその闘いの力を数百倍し国際反戦集会へ結集するならば、国内的には七〇年安保粉砕の政治基調をさし示し、国際的発展闘争の止揚の方向性を力をもって明示することになる。沖縄—ASPAC闘争と国際反戦集会はかかる観点から連続した諸闘争であり、われわれはこの連続性をもってのみ六八年後半の階級闘争の基軸を確立しなければならないのである。

日帝総路線対決に諸階層を統合せよ

六八年後半、日帝政治委員会は佐藤三選—訪米—沖縄問題の決着を一挙的に実現し、かつ強権的抑圧態勢をひいて階級的界限そのものの粉砕をねらっている。われわれは来るべき、7・27沖縄—ASPAC闘争を闘いぬき、その力を国際反戦集会に結集し、この二大闘争のなかで七〇年安保粉砕闘争を闘いぬき、日帝打倒闘争へとひきつぐ真の指導力を政治的・組織的にさらに広範な大衆のなかに確立しなければならない。このことによって日帝総路線対決を不抜の力として全国の戦闘的労働者、農民、学生、市民のなかに築き、秋の安保闘争の階級的反撃を革命的にうちきたえなければならないであろう。全学連・反戦の組織的整備は、まさにかかる闘いを媒介しより発展したものとしてかちとらねばならない。そして革命的統一戦線のふたつの戦列の強化再編は日帝支配階級のせまり来る攻撃と対決しこれを粉砕しぬくであろう。予定された成田ボーリング決戦にも現在からあらゆる組織的体制をとりつつ断乎として徹底的にこれと闘いぬかねばならない。

全国の労働者・学生諸君！
7・27沖縄、ASPAC闘争に全力結集せよ！　国際反戦集会を全国で戦闘的大衆との国際連帯—安保粉砕日帝総路線対決の強固な決意の場とし大衆的に組織せよ！
全国に全学連・反戦のあらたな拠点を建設し、反帝世界革命への革命的統一戦線を構築せよ！

◇

中核派の全学連逃亡を弾劾し　反帝全学連の戦列を強化せよ

七・一七　社学同全国政治集会
七・一八　都学連／一九・二〇　全学連大会

社会主義学生同盟全国委員会

70年安保—70年代階級闘争とプロレタリア国際主義

全学連大会へのわれわれの主張と中核派

今全学連大会の任務は、10／8訪ベト闘争以降の階級闘争の新局面を総括し、70年安保〜70年代階級闘争の展望を確定することである。

訪ベト—10／21国際反戦スト—訪米阻止—エンプラ—成田—王子闘争は70年代階級闘争における革命的高揚の性格を全学連—反戦青年委員会の闘いを基軸に、先駆的に示した。かつ4／26、27—28国際反戦・沖縄闘争は、この革命的高揚の限界をも、また示したのであり、6／7—21—28ASPAC粉砕闘争は、この限界の克服の方向を提示するものであった。

この反戦闘争の高揚は、日帝のアジア侵略・反革命の強化によって促進された。日帝は極東・東南アジア・太平洋地域をめぐる、米帝への世界分割（侵略）と、中国—アジア人民武装解放闘争への反革命を、日米安保＝反革命同盟内での主導権の奪還として遂行させており、その政策的表現として、訪ベト・訪米・エンプラ寄港・成田空港建設・王子野戦病院設置等が進行したのである。

訪ベト阻止闘争は、かかる日帝の動向に対する最初の闘いを通して、自国ブルジョアジー打倒と帝国主義打倒というベトナム革命の永続性を、日本階級闘争に内在化させ、プロレタリア国際主義の内実を形成する決定的契機となったのである。

10／21国際反戦ストの最大の意義は、訪ベト阻止闘争によって切り開かれたベトナム—アジア後進国人民武装解放闘争との結合と、この結合こそが、反戦闘争—日本階級闘争の大衆的高揚を形成することを、はっきりと示したことである。

10／21国際反戦スト—訪米阻止闘争へ至る過程で、日本階級闘争は、ベトナムに対する自国帝国主義の侵略反革命策動に対し、帝国主義軍隊解体闘争を闘かっている米国反戦闘争との結合を媒介として、自国帝国主義の侵略反革命打倒—自国帝国主義打倒へと、プロレタリア国際主義を深化させる突破をつかんだのである。

かかるプロレタリア国際主義の深化の方向性を、最も意識的に把握した、全学連—反戦青年委員会の闘いは、エンプラ闘争において佐世保現地実力闘争と、首都権力中枢への実力闘争を展開した。この闘いの最大の意義は、日帝のアジア侵略反革命粉砕—日帝打倒を展望し、反戦闘争を、プロレタリア権力闘争として展開する路線の闘争戦術を実現したことである。

70年安保—70年代と全学連の任務

訪ベト—10／21国際反戦—訪米—エンプラ闘争において、全学連—反戦青年委員会は、この闘いを独力で切り開き、社共の議会主義的統一戦線から、自からを分離しプロレタリア統一戦線へ発展する方向性を示したのである。

かつ、この闘いは、エンプラ—成田—王子闘争へ至る反戦闘争の自然発生的高揚をひき出し、この下に、総評闘争を包摂し、70年安保〜70年代階級闘争に於る革命的高揚の性格を、はっきりと示したのである。

だが、この反戦闘争の自然発生的高揚の質は、反反革命、反米を基本的な質とし、この限界性は、4／26—27—28国際反戦—沖縄闘争に於て全面的に露呈したのである。

日帝は、反戦闘争の自然発生的高揚に対する反撃を、訪米以降、沖縄返還—自主防衛を基軸とする対米自主路線の下に開始してきた。他方で、米帝のベトナム戦争的和平交渉が進行する中で、反反革命、反米を基調とするこの自然発生的反戦闘争は、日帝の対米自主路線の下に、分解を開始した。この分解の過程こそ、反反革命・反米の質の下に、沖縄返還を主張する分派の4・28沖縄闘争からの逃亡であった。

かかる、自然発生的反戦闘争の分解の中で、日帝の沖縄返還を、日帝による沖縄のアジア侵略反革命前線基地化として、正しく把握した全学連—反戦青年委員会は、首都、権力中枢下で、鋭い闘いを展開したのである。

6／7—21—28闘争において、全学連—反戦青年委員会は、ASPAC—沖縄返還—成田空港—自衛隊の強化へ至る、日帝のアジア侵略反革命の総路線と、その当面の焦点たるASPACを全面的に暴露し、大衆を組織化し、首都と大阪における大衆的実力闘争を展開してきた。

自然発生的反戦闘争の後退の中で、全学連—反戦青年委員会が、唯一、大衆的実力闘争を展開しえた根拠は何か？　その第一は、日帝のアジア侵略反革命粉砕—日帝打倒のプロレタリア国際主義である。第二は、侵略反革命の軍事外交路線との対決＝反戦闘争を、プロレタリア権力闘争として闘い抜く運動論＝革命的反戦闘争と、その闘争戦術＝中央権力中枢への実力闘争である。第三は、自己を一貫して、プロレタリア統一戦線へ高めることを追求してきたことである。

10／8訪ベト闘争以降の全過程は、70年安保〜70年代階級闘争の基本的性格を、表現しているものとして把握、総括され、展望が提出されなくてはならない。

我々は、この方向性において、プロレタリア国際主義—革命的反戦闘争—プロレタリア統一戦線をもって、革命と反革命の激突の時代たる70年代階級闘争への戦略・戦術的展望を提起する。7／26—27ASPAC粉砕、三木外相訪豪阻止中央実力闘争と8・3国際反戦集会は、この観点から位置付けられ、実践される。

米帝＝世界体制の超帝国主義

中核派「帝国主義論」の誤り

70年安保〜70年代階級闘争が、戦略・戦術的展望を探求することは、党派闘争の全面化を意味する。10／8闘争以降の党派関係の流動・分解と、それによる大衆運動の分裂は、この様な性格をもって進行してきた。それは、6／15集会—7月全学連大会—8月反戦集会へ至る過程で、70年安保〜70年代階級闘争の原型を確定していく。

わが同盟と中核派の関係、就中7月全学連大会は、この焦点として存在する。

だが、破廉恥にも、中核派は、この全学連大会から逃亡した。この逃亡は、単に、全学連からの逃亡にとどまらず、プロレタリア革命の全戦線からの逃亡である。何故なら、訪米阻止闘争、4／26—27—28国際反戦沖縄闘争に敗散的な彼等の破綻は、日帝の対米自主路線に基く反米への敗北の証左であり、かつ、このことによって、革命と反革命の激突たる70年安保〜70年代階級闘争に於る、反革命への敗北を示したものである。

帝国主義的世界分割の焦点は、米帝に対する西独・日帝の再分割であり、それは西独・日帝による国際反革命同盟＝NATO、日米安保の再編、米帝にとって代わる主導権の争奪として進んでいる。その主導権争奪の中心は、西独帝による東欧、中近東への侵略・反革命を展望した、NATO中央正面軍（対ソ戦線）へ集中した軍事力強化と、日帝による、極東・東南アジア・太平洋地域への侵略・反革命を展望したアジアの軍事拠点＝沖縄の返還要求と自衛隊の強化とである。ベトナム—アジア—中南米へ至る後進国人民武装解放闘争に対する米帝の侵略・反革命の全面化につけて加えて、西独・日帝のかかる動向は、NATO・日米安保を、全世界の階級闘争に対する国際的反革命の最大の軍事機構とし、全世界人民の共同の打倒対象としてである。69年NATO再編、70年日米安保再編は、帝国主義の世界分割の焦点であると同時に、帝国主義の国際的反革命の焦点である。

国際主義なき一国革命論

かかる帝国主義の動向を、中核派は、次の如く把握している。「スターリン主義の裏切りを条件とした、戦後帝国主義の延命の基礎としての、米帝を軸とする帝国主義『世界体制』↓米帝の危機↓帝国主義『世界体制』の危機↓諸帝国主義の危機↓諸帝国主義の協力した帝国主義『世界体制』の強化」が、彼らの論理であり、この帝国主義『世界体制』の軍事機構として、NATO・日米安保を把えている。

この誤りの第一は、帝国主義の危機を、その対外関係における危機のみで把握する現象論、客観主義である。帝国主義の危機は、その国民経済—民族国家内でのブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立による本質的な内的危機が外化して、対外的危機（帝国主義間対立、民族解放闘争、「労働者国家」への侵略・反革命）を形成、この対外的危機が内在化して内的危機を深めていくものとして、内的危機と対外的危機の統一として把えられなくてはならない。だが、中核派の把握の中では、EEC・日帝の台頭、後進国人民武装解放闘争と反戦闘争・黒人暴動による米帝の危機以外は、帝国主義「世界体制」の危機↓諸帝国主義の危機として対外的危機しか論理化されていない。この現象論、客観主義は、日本革命の展望を、プロレタリア国際主義なき一国革命論へと転落させるのである。

第二の誤りは、帝国主義「世界体制」それ自体が物質的基礎をもつかの如く把握する超帝国主義論である。NATO・日米安保での帝国主義の同盟は、ロシア革命の勝利以降の現代世界＝過渡期世界に於る、帝国主義の国際的相互関係の特殊性に起因する。「労働者国家」の成立↓国際階級闘争の全勝↓帝国主義国に於る攻撃型階級闘争によって、この内的危機の外化たる国際的相互関係を、世界分割と「労働者国家」と国際階級闘争への国際的反革命の統一として形成せざるをえない。戦後帝国主義「世界体制」、NATO、日米安保は、国際的反革命のための諸帝国主義の同盟であり、米帝は、この国際反革命同盟の盟主たることによって、世界分割と国際反革命を統一してきたのである。この条件は、第一に、他帝国主義に対する、経済的、政治的、軍事的力量の圧倒的優位であり、第二は、国内労働者階級の帝国主義的分断運動（AFL—CIO）への統合であった。米帝の危機は、この世界分割と国際反革命の統一性の崩壊に他ならない。EEC・日帝の台頭は、その経済的・政治的・軍事的力量を相対的に後退させ、第一の条件を喪失させつつある。後進国人民武装解放闘争への敗北による反戦闘争の高揚と黒人暴動の爆発は、第二の条件を喪失させつつある。今や、西独・日帝が、米帝と対抗し、世界分割と国際反革命を統一すべく登場せんとしているのである。従って、帝国主義「世界体制」、国際反革命同盟は、不均等発展を通しての世界分割の展開という帝国主義の運動によって再編が不可避な、帝国主義の国際的相互関係にすぎないのである。これを固定化し、それ自体が、直接的な物質的基礎をもつという把握＝超帝国主義論は、西独・日帝の永久的な米帝への従属↓NATO・日米安保＝権力（合同権力論＝超主義国家論）↓自然成長的革命論↓人民戦線左派への転落を、論理的帰結としてもたらすのである。これが、中核派の末路である。

過渡期としての現代と帝国主義

さて、西独・日帝が、世界分割と国際反革命を統一して登場せんとする過程を分析しなくてはならない。それは、同時に、攻撃型階級闘争—革命的高揚の過程でもある。

過渡期世界は、世界の帝国主義諸国家、後進資本主義諸国家、「労働者国家」群の三ブロックへの分裂として現象している。

帝国主義国の階級闘争は、直接的なブルジョアジーとプロレタリアートの対立であり、それは、帝国主義の運動、即、国内的には、独占↓金融資本↓金融寡頭制（国内抑圧）と、対外的には、資本輸出↓世界の経済的分割↓世界の領土的分割（世界分割＝侵略反革命）によって激化し、非和解化する。

後進国階級闘争は、帝国主義の侵略反革命と結合した民族ブルジョアジーに対する、農民—プロレタリアートのブロックの武装解放闘争として、自国ブルジョアジー打倒↓帝国主義打倒の永続性をもって闘かわれている。

「労働者国家」は、スターリン主義の一国社会主義路線によって歪められた過渡期社会であり、世界的次元での帝国主義の打倒とプロレタリア独裁の実現を主体的条件として、社会主義の建設が成功されない限り、階級闘争は継続している。それは、国内経済建設の困難と、帝国主義の侵略反革命が結合する時点で、一挙に全面化し国際的階級闘争に合流する。

「労働者国家」成立下の国際階級闘争

この三ブロックの特殊性は、根本的には、帝国主義の存在に規定され、直接的には、帝国主義の侵略反革命に規定されて、この結

（二面に続く）

全国の学友は全学連大会（7／19・20）に総結集せよ

七月八日、全学連拡大中央委員会が、中央執行委員会の招請により、中央大学学生会館において、午後五時より開催された。

集会は、久保井全学連中執の活動報告のあと、東京大、早大、中大等の学生が、中核派の全学連からの逃亡を弾劾し、全学連の革命的再編とASPAC闘争の闘う決意を表明した。その後、関西全学連中執は、次の四点に渉る提案を行い、満場一致で確認し、次に、委員長秋山の罷免により、久保井全学連中執を全学連委員長代行に選出したい旨提案され、満場一致で確認された。委員長秋山が全学連から逃亡して以来、全学連を一身に背負って来た藤本全学連副委員長（写真、下）は、6・21ASPAC闘争に対する不当弾圧にあい7月5日事後逮捕されたにもかかわらず、全学連の革命的再編の礎石は、この日の拡大中央委員会で力強く打ち固められた。官憲は、全学連大会の破壊の策動として藤本副委員長を不当逮捕したが、いまや、この策動は粉砕され、全学連大会の開催は不動のものとなった。

委員長　秋山を罷免

7・8全学連拡大中央委員会

七月五日、明治大学に於ける全学連中央執行委員会の決定に基づき、本日の拡中委に次の事を提案する。

一、委員長秋山の罷免に関する提案
一、委員長代行の選出に関する提案
一、全学連第十九回大会の日程（七月十九日中央大学講堂、七月二〇日東京大学安田講堂、午前十・〇〇〜午後八・〇〇）の確定に関する提案。従って七月十四日〜一六日の「全学連大会」は一切認められないこと。
一、全学連大会開催にむけて、大会実行委員長及び実行委員の選出に関する提案。

全学連の闘う学友諸君！

全学連再建以来一年有余、全学連第一九回大会を目前に控えて、わが全学連は未曾有の危機を経験しつつある。我々全学連中央執行委員会は、現在進行している全学連の危機を全力をあげて闘争すべく努力することを決意し、同時に全都全国の先進的学友諸君に、いかなる分裂策動をも排除し、果敢かつ大胆な行動の上に、全学連大会成功にむけて総力を結集するよう要求し、よびかけて来た。

一〇・八羽田闘争以来「激動の七ヵ月」を闘い抜いて来た我々は今こそ、七〇年安保粉砕の一点に向けて全学連の闘う態勢を、より一層強固なものとしなければならない。来たるべき全学連第一九回大会こそ、その決定的な結節点である。

だが学友諸君、この全学連大会を準備するにあたって、大きな障害も又に横たわっていることも報告しなければならない。

即ち、一〇・八羽田闘争以降の闘いの経験がはっきり示しているように、ベトナム革命の勝利的前進と、それに呼応した反戦闘争の昂揚、全国基地闘争と七〇年安保粉砕に向かう労働者人民の決起と、固く結合したわが全学連が、全人民の最先頭に登場し一切の帝国主義の攻撃と弾圧を粉砕しようとする時、また全学連が全世界の闘う人民に対し、自己の国際的任務を果たそうとすればするほど、全学連は狭い党派的利害をのりこえて相互批判・相互討論の上に、強固な戦線の統一をはからなければならないことを要求されている。

しかし、事態はまさに逆に進行している。一〇・八以降全学連の統一した旗幟は失なわれ、分裂へと発展しようとしている。全学連「主流派」マル学同中核派という一部党派利害むき出しの派閥闘争の破綻は、委員長秋山をして、統一した全学連委員長としての任務放棄として表現されている。我々は、もはや現在経験している全学連の危機が、形式的技術的な方法によって、回復することができないこと、いかなる運動論上における路線の相違を、鮮明にしたものであることを確認できる。

我々は、委員長秋山に対する全学連の統一性の回復にむけた任務の要求と、[illegible]、全国[illegible]と七〇年安保[illegible]三四回よびかけ、その自己批判的克服を要求して来た。それにもかかわらず、我々の提案をうけいれないのみならず、よりエスカレートしたセクト主義的対応によって応えたのみだった。実に驚くべきことには、この間の闘いの総括討論を一切提起しないのみか、「全学連大会」を七月十四日〜一六日に招請したことによって、分派の鮮明どころか、一層派閥的分裂のうわぬりを計画したのである。

この委員長秋山指導の「全学連大会」を認めるか否かという問題提出によって自己の非化と派閥の[illegible]を策動しているのだ。

我々は、全国百万学友の名において、提案し提案する。「目前に迫った全学連大会の圧倒的成功と、分裂大会粉砕のため、本日の拡中委において委員長秋山を罷免し、闘う態勢を確立せよ」と。

全学連の学友諸君！我々は、七月一四日〜一六日の「全学連大会」を認めることはできない。

全学連の分裂策動を粉砕し、七〇年闘争勝利にむけた全学連大会に総結集し、圧倒的にかちとることを提案する。

全国の闘う学友諸君！！

全学連の革命的伝統は、我々を[illegible]しなければならない。

今や、眼前には世界史的転換点に到達しようとしている。即ち全世界人民の革命的決起による帝国主義世界の根底的全面的打倒、そして新たな社会主義建設の時代なのか、それとも帝国主義的「平和」の時代に委ねさせられてしまうかどうかである。帝国主義世界の危機的局面は、より深くより広く全地球上におおいつくし、被抑圧人民の決起的革命戦争の永続化は、帝国主義中心部の反戦闘争と固く連帯し、階級闘争は国境を越えて国際的な結合を準備しつつある。これに応えることこそ全学連の任務でなければならない。

現在、我々が経験している全学連運動の危機を厳しく克服するのは、小ブル反戦派として帝国主義運動派主義に自己を立脚させるのか、それともプロレタリア国際主義に立脚した反帝反戦闘争を推進するのかを最も鋭角的に問うているのである。

全学連の学友諸君！

我々は、全学連の革命的伝統をうけつぎ、国際階級闘争の前衛的中心的任務を自覚し、大衆的な力争でもって、帝国主義を葬り去るべくしん撃せしめようではないか。

一九六八年七月八日
全学連
中央執行委員会

国際反戦集会の意義

国際階級闘争の高揚に

プロレタリア国際主義の内実を！

米帝の相対的地位の低下、西独、日帝の抬頭──この帝国主義世界の不均等発展は、後進諸国人民の不屈の反帝闘争とあいまって、帝国主義的対立の激化と帝国主義の危機をかつてなく強めている。

そして、米帝の一元支配の崩壊、各国帝国主義独自の侵略反革命の路線形成と交錯、対立、という戦後帝国主義の新しい局面は、国際階級闘争を規定し、それに新らしい変化を与えつつある。

レーニンは、帝国主義的争闘の激化という国際情勢の中で、かって、次のことを指摘した。

「社会主義的日和見主義は、それに先だつ『平和な』時代の労働運動の発展の産物として成長したものである。この時代は、議会政治とすべての合法的可能性との利用、大衆的な経済組織の創設、広範な労働者定期刊行物の創刊などのような闘争手段を労働者階級におしえた。他方では、この時代は階級闘争を否定し、社会平和をとき、社会主義革命を否定し、非合法組織を原則的に否定し、ブルジョア帝国主義をみとめようとするなどの傾向を生みだした」（「日和見主義とインターの崩壊」）

「社会排外主義の基本的な思想的政治的内容が日和見主義の基礎と完全に一致することは、まったく明らかである。それは同一の潮流である。」（「第二インターの崩壊」）

即ち、日和見主義は、帝国主義的対立の激化、内的危機の外化としての侵略反革命という帝国主義的争闘の全面化の中で、自らを社会排外主義に転化させ、その「階級協調」の本質をあらわにすること、これである。

70年安保──70年代階級闘争は労働運動内の左右の相剋を、帝国主義的激動下の自国ブルジョアジーに対して、彼らと共に「自国防衛」と侵略反革命という危機の外化に「協調」し「自国」への忠誠に励むか、それとも、自国ブルジョアジーの危機をおしすすめ、その破綻・敗北を追求するのか、すなわち社会排外主義と自国帝国主義打倒＝プロレタリア国際主義の二つの対立、革命と反革命の対立に鮮明化させずにはおかない。

われわれは、七〇年代階級闘争のかかる性格を解明し、「帝国主義の侵略・反革命と対決し、国際的階級危機を世界革命へ」の展望下、全世界プロレタリア人民による国際的な自国帝国主義打倒のプロレタリア国際主義の戦略を断乎として貫ぬかねばならない。

この戦略に基づき、共産主義者同盟は、党的展望としての世界党建設を展望しつつ、第七回大会において、国際部を確立し、そのための現在的任務を次のように規定した。

第一に「世界革命の任務の一環」としての国際部の設置であり第二に、その任務はわれわれが国際共産党を今ただちに成立宣言できず、しかし、その要求が死活である今日、「全世界に戦略的基準を持った、生きた交通形態の生産こそ先決である」ことであり、第三にその活動内容は「（A）単一共産党形成─国際共産主義運動の戦略的統合のための統一戦線──党派闘争の日本における拠点であって、（B）国際的な運動の統一反帝反政府闘争の国際的反戦闘争の党レベルでの意思統一の形成が常に実践に問われ、（C）大衆組織、ことに全学連などによって推進さるべき反戦インターの組織と運動の指導機関であって、（D）我々の国際活動の実態を知りつつして展開せしめるに到る国際情勢認識の中枢である」

それゆえ、第四に、この活動の質は、第４インター系の単なる紹介や、没主体的な外国運動に対する拝外とは無縁であり、また中国派にみられる出先機関とは異質である。更に第五に、ソ連・日共に見られる自己の没国際性─一国革命闘争論と人民戦線＝議会主義コースを左翼的スクリーンでおおうための大衆操作的国際活動と決定的に対立する。

そして、共産主義者同盟は、まさに、かかる諸方路線の具体化の第一歩として「八月国際反戦集会」を設定し、四月以降、国際部員の欧米、アジア、中南米派遣をも含めて、その正確的な成功のために精力を傾けてきた。

全国の青年労働者諸君、革命的インテリゲンチャ諸君。

帝国主義の侵略反革命に抗し、全世界的なプロレタリア国際主義の戦列をうち固めるために「八月国際反戦集会」に成功させようではないか。

われわれは、諸君と共に世界各国において、社会排外主義が萌芽を示し、且つ、スターリン主義が、この一翼に転落していること、

だが、これら社会排外主義、スターリン主義を拒否したところの階級闘争が、いまだ自然発生的ではあるが、各国に強力な息吹きをもって存在しており、それらが、世界的規模の統一指導を要求していること、を明らかにするであろう。

そして、これらをふまえた政治的獲得目標を基礎に、次の諸点に設定し、そのために全力をあげようではないか。

（A）10・21を、ベトナム、NATO、七〇年安保粉砕の国際反戦闘争としてかちとること。

（B）米帝の佐藤訪米阻止を、羽田─ワシントンの共同闘争で阻止すること。

（C）69年NATO、70年安保を闘う日、米、欧の統一的政治闘争の準備に入ること。

（D）70年安保を、環太平洋地帯の武装実力闘争として闘い抜くこと、の諸点である。

全国の戦闘的労働者、学生諸君七・二七ASPAC闘争を断乎として闘い抜き、その闘いの質をもって「八月国際反戦集会」に結集せよ！本格化し全面化しつつある帝国主義的争闘、帝国主義的ナショナリズムとそのうずの中への人民のまき込みに抗し、社会排外主義をうちやぶるための全世界的な階級闘争の結合──プロレタリア国際主義──自国帝国主義打倒──にむけて、その画期的一歩をふみだそう！

ゲートへ戦闘的デモ

茨大射爆場闘争

【茨城大分局】「水戸射爆場即時撤去／原潜再寄港＝返還阻止／8・29闘争」が、茨城大の社学同の学友を先頭にして闘いぬかれた。

二九日午後の茨大学内集会は、右翼・学校側が「他大学の学生は入れない」ために、正門以外の全ての門の閉鎖─全教官の出動命令─右翼の動員、茨大闘争史上初めての緊迫した雰囲気の中で、一五〇名の学友を結集してかちとられた。これまで茨大の戦闘的学生運動をおさえてきた反戦学評書記局の崩壊宣言の後、全茨連代表として明大学生会中執の米田委員長、東京反戦の佐藤化学人から連帯の挨拶があった。集会後、学内デモ（三〇名）、さらに南高区大の学友を加えて五〇名の茨大生がバスに乗り込んだ。阿字ヶ浦駅構内の決起集会では、日中友好協会（正統）と地元高校生・勝田市民・労働者・農民等を加えて約八〇名で開かれ、住民の熱烈な拍手が送られた。

集会後、射爆場ゲート前に向けて戦闘的デモ、ゲート前での激しいうずまきデモ、どしゃぶりの中での集会が始められた。射爆場側はこの力によって中止され、バラ線・バリゲードをめぐらし、砂利をとりはらったゲートは固くとざされ、機動隊が反対側にうごめいていた。五時過ぎ、自衛隊勝田駐屯所から勝田市築港街へむかった。機動隊百名の制圧をうけながらも、県下初めてのジグザグ・うずまきデモをかちとったのである。勝田駅構内では、多くの労働者が見守る中で抗議集会を行なった。そして射爆場撤去・再処理工場阻止にむけて、さらに工場ビラ等の情宣─組織活動を続けていくことが確認された。

成田現地報告

６月30日、全国から闘う労働者・学生が、四千名結集し、水準測量─ボーリング阻止の決意をうち固めた。この６・30闘争は、成田決戦が近づくにつれ、機動隊の暴挙・テロ・リンチが横行し、強められる成田現地にあって、現地反対同盟の結集的意志「決戦」を促すものであった。

官憲はこれ以降もますます卑劣な攻撃を現地反対同盟と派遣団に加えているが、不当逮捕者を出しながらもゲリラ戦が激烈に展開されている。

７月２日、十余三では反対同盟二五〇が抗議行動を行ない、８日鉄台で二〇〇名が決起し、10日には千代田でも闘いが続けられた。これら各地では条件派の財産査定が、機動隊・私服に守られた公団職員によって行なわれている。官憲・公団は、11日には、芝山に侵入して、これを行なおうとした。鐘を聞いて駆けつけた反対同盟員・現地派遣団三〇〇名は、激しく抵抗し財産査定を阻止しようとした。これに対して官憲（機動隊三〇〇＋動員した私服五〇）は、激しいテロ・リンチを行ない、宮沢一利さん行動隊長以下、反対同盟一人・その他成田闘争の記録を作るために撮影していた小川プロのカメラマンまで不当逮捕し、カメラマン一人を入院させ、朝日新聞の記者をも殴りつけて負傷させるという気違いじみた暴挙に出た。

現在、財産査定は、横堀地区を残すのみとなり、七月末─八月初旬に予想される水準測量─ボーリング開始を控えて、現地では、このような官憲の暴行に対して一そう闘いの決意を固めている。現地派遣団は、全国の闘う労働者・学生に、物質的・精神的支援を要請する。（共産主義者同盟現地派遣団／七月十二日）

日大夏休みはねのけ

理工学部もスト

【日大分局】六月十九日、日大当局は、19項目からなる日大刷新案を新聞紙上に発表した。

「刷新案」の内容は、極めて一般的抽象的なものであって、これを読んだ学生は、ますます闘いの決意を固め、ついに、七月六日には、理工学部もストに突入した。

大学当局は、この「刷新案」で、夏休み前の学生戦線を切り崩し、戦線分断を計ろうとしたわけだが、それどころか、いよいよ闘う戦線を拡大させたわけである。

だが、日大闘争を内部から検討した場合、現在、克服すべき重要な課題が横たわっていることを確認しなければならない。

第一に、闘いは、バリケードというきわめて高度な戦術が純化されず、危険罪と恐怖罪といういまだ非論理的なものにすぎず、サンディカリズムに落ち入る可能性を充分に含んでいること。

第二に、闘争の質が、学園民主化という域を出ておらず、そのスローガンも、①理事者は総退陣せよ、②許可制の撤廃、③経理を全面公開せよ、④不当処分撤回、⑤集会の自由、といういわゆる「民主的要求」に限定されていること

われわれは、闘争のかかる現段階的性格に対して、それに拝跪することなく、まず第一に、日大闘争の歴史的階級的位置と意義（とりわけ、10・8以降の新たな局面における）を明らかにし、全人民的政治闘争・革命的反戦闘争との両者を鮮明に示せつつある。

そして第二に、日大闘争を全人民的政治闘争の一環としての個別闘争として位置づけることを通して、闘争の本質は、前近代的営業云々に対する民主化云々ではなく、まさに、社会的階級的闘争であることを自覚させ、かかる闘争として目的意識的に推進させつつ団結の質を、改良主義的経済主義的なそれから、上からの大胆な政治路線の持込みによって、政治的な団結の質に止揚することである。

一五〇名の支援集会

兼六館労組へ

前号既報どおり、都内千代田区の兼六館出版労組の闘いは、地区の労働者の支援と連帯が強化され、勝利へむかって進んでいる。

事実経過のあらましは次のとおり。

去る六月三日、同社西村取締が労組委員長の「横領」事件をデッチあげ、六日会社側は委員長に解雇通告という挙に出た。労組はただちに団交を要求、この不当解雇撤回の闘いにたちあがった。二三日には共闘会議が結成され、七月六日にはこの傘下の支援労働者を加えて一〇〇名、十一日には一五〇名にのぼる集会が開かれ、労働者の階級的団結がうち固められてきている。

会社側はこれに挑発し、七月一、二日の第一次・第二次団交が決裂─スト突入となるや、同三日午前〇時・九時・十一時五十分の三度にわたって警官を導入、九名を不当検挙した。組合員は、支援労働者とともに怒りをこめて、あくまでも不当解雇撤回へむけて闘いを続けている。

国際集会ニュース

前号において、われわれとともに「プロレタリア国際主義の旗の下」日本階級闘争を闘う部分の結集によって、かちとられた「八月国際反戦会議日本実行委員会」は、既に具体的宣伝・組織活動に入り、全国の闘う労働者、学生、インテリゲンチャの注目と期待を集め始めている。

集会の要領は次のとおりである。

記

①七月二五日午後六時　千代田公会堂（入場カンパ百円）主催日本キューバ文化交流研究所

「キューバ革命十五周年記念前夜祭」

②七月二六日午後六時　日比谷公会堂（入場カンパ百円）主催

八月国際反戦会議日本実行委員会

「キューバ革命十五周年記念演説集会」（OLAS・SNCC代表講演）（集会後デモ）

③七月二七日午前十時　明治大学学生会館

「八月国際反戦会議・予備会議」

各国代表あいさつ闘争報告、交流

七月二八日午前十時　明治大学学館

「八月国際反戦会議　予備会議」

世界革命における国際反戦闘争の位置

七月三十日午前十時　明治大学学生会館

「予備会議」

七〇年へむけて学生運動と労働運動

七月三十一日午前十時

明治大学学館

「八月国際反戦会議　予備会議」

国際的組織の建設について

（国際的反戦インター、国際学連について）決議・宣言等採択

④「八月国際反戦集会」

この後全国各地反戦集会の開催について次の各地で行うことを確認し、日程については随時確定する。

大阪、広島（又は岡山）・福岡（又は長崎）・名古屋・仙台・札幌、他

⑤外国代表の参加連絡

OLAS・SNCC・参加決定

NBAWADU＝黒人反戦反徴兵委員会　ジョン・ウィルソン、ジェム・フォーマン

SWP（アメリカ）社会主義労働者党委員長　ハルステッド

SDS（アメリカ）社学同系、マイク・スピーゲル

SDS（西独）社学同、ウォルフ副委員長

フランス全学連、イタリア社学同

氏名未定

（一面よりつづく）

済的・政治的基盤の上に単一化され、全体の個々の環を構成する。かつ、三ブロック内の階級的力関係は、相互に連関し、帝国主義国における階級的力関係に発展・転化し、逆に、これは後進国「労働者国家」内の階級的力関係を、根本的に規定する。

過渡期世界における国際階級闘争のこの構造は、帝国主義分割─世界戦争をめぐって形成されるプロレタリア革命の条件の諸形態を変化させた。

第一次大戦へ至る過程で、諸帝国主義は、植民地領有─超過利潤─労働者階級の買収を通して、国内労働者階級の中に日和見主義を形成し、帝国主義間対立を媒介にこの日和見主義を社会排外主義に転化させ、世界分割─世界戦争へ突入した。この敗北の結果、帝国主義国プロレタリアートは、レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」の如く、社会排外主義と帝国主義の物質的基礎である国民経済─民族国家が、帝国主義世界戦争によって、経済的・政治的・軍事的に破壊されるのをまって、この敗北を克服し、プロレタリア革命を実現するという、受動的な闘いを展開せざるをえなかったのである。

だが、過渡期世界に於て、帝国主義国プロレタリアートは、帝国主義の世界分割が、世界戦争へ発展する以前に、帝国主義打倒・プロレタリア独裁を実現する攻撃的な闘いを展開しうる条件を与えられた。「労働者国家」の成立とそれに支えられた国際階級闘争の高揚が、世界分割の過程で、帝国主義に対外的危機を形成し、この内在化を通して、帝国主義の内的危機の激化＝国内階級闘争の革命的高揚をもたらすからである。従って、帝国主義の世界分割の過程が、同時に、国内に於る革命と反革命の激突の過程である。

過渡期世界において、帝国主義は、この対外関係を、他の帝国主義に対する世界分割（侵略）と、「労働者国家」と国際階級闘争に対する国際的反革命との統一として形成しなければならないし、それは、国内の攻撃型階級闘争＝革命的高揚に対する反革命の勝利を通してのみ可能となるのである。

西欧30年代の敗北の教訓

プロレタリア国際主義の欠如

米・英・仏・西独・日本の全帝国主義国で始まっている階級闘争の高揚は、まさしく攻撃型階級闘争＝革命的高揚の開始として把えられなくてはならない。そして30年代西欧における攻撃型階級闘争の敗北が総括されなくてはならない。

ロシア革命の勝利（労働者国家の登場）と帝国主義の経済的対立＝経済的危機の進行とが、帝国主義国に、攻撃型階級闘争を形成した。だが、枢軸国（独・日・伊）帝国主義は、この攻撃型階級闘争に直面した結果、これを、危機の先行した小ブル、ルンプロの暴力（ファシズム）でもって粉砕し、反革命に勝利することを抜きにしては、連合国（米・英・仏）帝国主義への世界分割＝世界戦争を展開しえなかった。何故なら、ベルサイユ「体制」は、米・英・仏帝による、枢軸国、特に独帝への世界分割と、ロシアソヴィエトとそれによる攻撃型階級闘争反革命との統一だったからである。

独プロレタリアートが、ファシズムの登場する以前に、独帝国主義を打倒しえなかったのは何故かが、第一に問われる。第二に問われるべき問題は、この闘いを連続的に、ファシズムとの闘いへと発展させえなかったのは何故かである。

独戦後革命の敗北

一国戦略の破綻

第一の問題の核心は、国際的なベルサイユ「体制」打倒の闘い（ロシアソヴィエトへの反革命干渉戦争反対闘争、勝利した米・英・仏帝による世界支配に反対する国際的なプロレタリアート・人民の闘い）の一環として、独帝への闘い、ベルサイユ「体制」を、ワイマール体制として受け入れ、帝国主義的復活を展望する独ブルジョアジーとの闘いを展開しえなかったことである。独戦後革命は独帝に対決する闘いを、この国際的な階級闘争と切断された地点、経済危機─経済闘争─武装蜂起として展開することによって、国際[illegible]した帝国主義の独帝へ対する経済的・政治的・軍事的援助（国際反革命）に敗北したのである。

帝国主義の世界支配に対する国際プロレタリアートの意識的な闘いを、自国帝国主義打倒─プロレタリア独裁を展望する闘いとして、具体的、一国的に展開しなくてはならないのである。この世界＝一国革命戦略とそれに基づくプロレタリア国際主義が存在しなかったことこそ、独戦後革命の敗北の要因である。

もし、それが存在したなら、独プロレタリアートは、ファシズムの登場以前に、独帝を打倒したであろうし、最低、二重権力状況下（組織された暴力＝ソヴィエトへ結集した中で）、ファシズムの組織された暴力と対決しえたのである。

だが、この敗北にもかかわらず、過渡期世界の攻撃型階級闘争は、29年世界恐慌を媒介に、再度の革命的高揚を、独にもたらした。ここにおいて、世界＝一国同時革命戦略に基づくプロレタリア国際主義は、一層の重要性をもってくるのである。

ベルサイユ体制と

世界＝一国同時戦略

何故なら国際的なプロレタリアート・人民の闘いは、ベルサイユ「体制」として登場した戦後国際反革命体制の統一性が、既に、帝国主義の不均等発展の結果としての経済的危機─帝国主義間対立の激化によって破綻し、各国帝国主義の世界戦略の再編が必至であり、とりわけ敗戦帝国主義にあっては、激烈な国内階級再編を伴って遂行せざるをえない段階にあって、かかる世界戦略（市場再分割＝侵略・反革命）─国内階級再編に対するプロレタリア国際主義を外化させた対決が、唯一、帝国主義の危機を根元的要因とする全世界的危機の時代におけるプロレタリア的解決の展望を切り拓くものとして提起されなければならないからだ。この過程で独帝は、小ブル・ルンプロのファシズム運動を組織し、一早く、ベルサイユ「体制」打破─世界分割を展望したのである。従って、既に前提とされたベルサイユ「体制」打破という独金融資本の「合意」の形成に対して、独プロレタリアートの問われた課題は、独帝ブルジョアジー─ファシズムのベルサイユ「体制」打破に対するプロレタリア的ベルサイユ「体制」打破の党派性（プロレタリア国際主義）の明確化であり、これとの対決（組織された暴力）であったのだ。にもかかわらず、「社会ファシズム論」に基ずくコミンテルン─独共産党の指導の誤謬は、かかる闘いを回避させることによって、独プロレタリアートの武装解除をもたらしたのである。

帝国主義の世界支配と対決するプロレタリアート・人民の普遍的な闘いを具体的、一国的な、自国帝国主義打倒の闘いへと内在化させ、そこにかかるプロレタリア独裁の実現によって、再び、対外的に全世界的次元でのプロレタリア独裁と社会主義建設へ向けて結合していくという、世界＝一国同時革命とプロレタリア国際主義への敵対者は、スターリン主義である。一国社会主義論─体制間矛盾論─二段階戦略が、スターリン主義の論理である。

スターリン主義の

反動的論理構造

スターリン主義は、一国社会主義論に立脚し、過渡期世界を、資本主義体制と社会主義体制の対立＝体制間矛盾論として把握し、国際路線を、一国社会主義建設下の障害たる帝国主義の侵略反革命（国際反革命）の阻止に設定し、帝国主義国プロレタリアートの任務を、この国際反革命の阻止＝ブルジョア民主主義政府の実現（二段階戦略）に設定するのである。

従って、正に、独において、ベルサイユ「体制」打破─世界分割を主張するファシズムとの対決が必要とされているにもかかわらず、現実に、ロシアへの脅威は、既に命運つきたベルサイユ「体制」であると取り違えて、独プロレタリアートを、ベルサイユ「体制」打破において、ファシズムと同盟させたのである。

枢軸国におけるファシズムの勝利をもって、ロシアへの脅威は、ベルサイユ「体制」ではなく、枢軸国ファシズムであることに気ずいた。この時点で、スターリン主義は、こんどは、枢軸国ファシズムとの対決を国際路線とし（反ファショ国際統一戦線）、連合国プロレタリアートを、ブルジョア民主主義の実現（二段階戦略）に於て、帝国主義と同盟させたのである。米帝は、これを外的条件として、世界分割と国際反革命を統一し、世界支配へ向かっていったのである。

焦点をなす西独帝・日帝

激化する帝国主義的対立

我々は、西独・日帝が、NATO・日米安保＝国際反革命同盟の主導権の掌握を通して、米帝への再分割を展開していることを確認してきた。これは、西独・日帝による、米帝への世界分割（侵略）と、「労働者国家」と国際階級闘争への国際反革命との統一への過程であり、同時にかかる対外関係へ外化する国内における、ファシズムによる、労働者階級─攻撃型階級闘争への反革命へ至る一過程でもある。

西独における非常事態法に対した労働者・学生の鋭い闘いは、帝国主義的労働運動＝社民党─DGBの分解・再編と革命的高揚（攻撃型階級闘争）への所産であり、かつ、他方で、帝国主義的非常事態法を基軸とする上からの反動化（帝国主義ナショナリズム）と下からのネオ・ナチに表現されるファシズムの台頭が結合しつつある。西独における革命と反革命の激突は、東西問題を媒介に、西独帝の対外路線と、米─ソ平和共存（米帝による世界分割と国際反革命の統一）が対立する時点で、この外的危機が内在化されることを通して形成される。それは、対米帝国主義戦争と、対ソ反革命戦争の同時的展開として、再度、外化されるであろう。

前進する日本の

攻撃型階級闘争

日本における攻撃型階級闘争は、はるかに前進している。それは、日韓条約─経済的膨張によって、一時的に形成された帝国主義的労働運動（民社─同盟─JC）の拡大を許さず、反戦闘争と経済闘争の大衆化をもたらし、日帝における世界分割と国際反革命の分裂を拡大させ、対米協調と対米自主路線へのブルジョアジーの分裂をもたらしている。この日帝における対米帝世界分割と、対中国─アジア人民反戦解放闘争への国際反革命の集中の表現が沖縄問題である。米帝は、日米国際反革命同盟＝安保の主導権を掌握することによって、アジアにおける、日帝への世界分割と、中国─アジア人民武装解放闘争への国際反革命を統一してきた。日米安保の主導権の掌握の表現こそ、アジアの軍事的拠点＝沖縄の支配である。従って日帝は、自衛隊の帝国主義軍隊化─沖縄返還─帝国主義軍隊の沖縄化を通して、世界分割と国際反革命の統一をめざすのであり、それは国内の攻撃型階級闘争への反革命の勝利をもってのみ可能なのである。この反革命は、アジアの分割をめぐる日帝と米帝の利害の対立が、沖縄問題を媒介に顕化し、攻撃型階級闘争が一方ではますます拡大し、他方で日帝ブルジョアジーの分裂が拡大する、経済的・政治的危機の深化の中で、小ブル、ルンプロの労働者階級─攻撃型階級闘争への暴力的対決（ファシズム）が開始され、日帝が、これに、反米帝─反中国・対外膨張の展望（帝国主義ナショナリズム）を媒介に結合するという過程を経て、登場してくる。従って、国内階級闘争におけるファシズムの勝利は、同時に、日帝による、対米・帝国主義戦争と対中国反革命戦争の開始となるであろう。

これが、70年安保＝70年代階級闘争の推進過程の展望であり、ここから逆規定して、我々の展望は設定されなくてはならない。

アジアへの侵略反

革命＝急激な日帝

第一の問題は、日米反革命同盟の強化とその中における主導権の掌握として進行している現局面の日帝の対外路線との対決から、日米反革命同盟の強化、対米─帝国主義的世界分割戦争、対中国─反革命戦争として登場してくる、きたるべきファシズムの対外路線との対決へと、連続的に推転しうる政治路線の基軸である。

日帝の対外路線の基軸は、その対外的諸関係がどうあれ、その資本が、アジアをめぐる、米帝への世界分割（侵略）と、中国─後進国人民武装解放闘争への反革命との統一であることに変わりはない。しかも、この過程そのものが、国内における攻撃型階級闘争─革命的高揚＝革命と反革命の激突を同時に進行するのである。

従って、我々の路線の基軸とその永続性は、日帝のアジア侵略・反革命粉砕─日帝打倒─プロレタリア独裁として設定されなくてはならない。

第二の問題は、日帝のアジア侵略反革命の対外路線がとり結ぶ対外的諸関係と、それが形成する日帝の対外的危機は、内在化され、この矛盾の永続的発展による国内階級闘争の深化─日帝の内的危機へ転化されなくてはならない。

アジアをめぐる世界分割戦の中で形成される日米両帝国主義の対立、経済的─政治的─軍事的発展に対し、日米両国プロレタリアートは、自国帝国主義の敗北─自国帝国主義打倒に於て結合しなくてはならない。アジア後進国人民武装解放闘争への日帝の侵略・反革命に対し、日本プロレタリアートは、これを阻止するにとどまらず、実現されるべき日本におけるプロレタリア独裁との結合の下に、アジア後進国における民族解放＝社会主義への連続性を指し示さなくてはならない。中国、北朝鮮等の「労働者国家」への日帝の反革命に対し、日本プロレタリアートは、これに反対し、阻止することを通して、「労働者国家」プロレタリアートを、国際階級闘争と世界革命運動の一翼に引き入れ、そのことによって、「労働者国家」に於ける革命的プロレタリア独裁の復活、実現の条件をつくり出さなくてはならない。

我々の路線の基軸

とは何か

帝国主義の世界分割＝侵略反革命の全面化を経済的・政治的基盤とする国際階級闘争の結合と、帝国主義国における攻撃型階級闘争の形成が、過渡期世界の特徴である。これを、世界的次元における帝国主義の打倒とプロレタリア独裁の実現（社会主義の条件）へ高める国際的任務を、帝国主義国たる日本において実現していくという、世界＝一国同時革命とプロレタリア国際主義として、我々は、日帝のアジア侵略反革命粉砕─日帝打倒─プロレタリア独裁という路線を展望するのである。

そして、８／３国際反戦集会はかかるプロレタリア国際主義を、全世界的に物質化していく国際的統一戦線である。

中核派は、「米帝の危機＝帝国主義『世界体制』の危機＝日帝の危機」の把握の上に、「70年安保＝日米同盟粉砕＝日帝打倒」を路線とする。これは、日米反革命同盟の中に内包されている最も鋭い矛盾、即、アジアをめぐる世界分割にかかる統一不可能な対立を完全に隠蔽するものである。そして、この日米両帝国主義の対立、外的危機が全面化する中で、これを媒介として、日本における反革命＝帝国主義ナショナリズムとファシズムの結合が形成されていくのに対し、プロレタリアートは武装解除するものである。

我々は、70年安保を、日帝の総路線との関連に於て、70年安保＝日帝のアジア侵略反革命の激化として把握して闘かっていく。日米反革命同盟に対決する全アジアプロレタリアート・人民の刃は、日本プロレタリアートによって、日帝打倒へと集中されていかなくてはならない。

70年安保＝日帝の侵略反革命とプロレタリア統一戦線

中核派の日米運命共同体論

＝修正主義国家論

中核派は、帝国主義世界体制論＝一国・総和革命論を、日米運命共同体論をもって補完しようとしている。

中核派は「日米同盟の危機」あるいは「日米両帝国主義の矛盾」を日米両帝国主義国内の革命的契機から説き明かすのでなく「権力構造」や「経済力」の弱さから、逆に「革命の現実性」を導こうとする修正主義に陥っている。

彼らは、好意的に解釈すれば以下五点を拠り所としている。

（前進・三九一号）

権力構造の弱さとして、

（1）反戦闘争、個別闘争の激化、日本型社民により、侵略に関する国民的合意が不可能

（2）自衛隊の兵員・兵器が不十分

（3）「戦後憲法体制」（小選挙区制、非常事態法がないなど）

経済力の弱さとして

（4）アジア資本輸出のためにはドルとの協調が不可避

（5）軍需の多くを米帝等に依存

超帝国主義論に

堕落した中核派

第一に（4）（5）に関しては国際通貨体制、過剰資本輸出の物神崇拝であり、岩田世界資本主義論＝帝国主義の自動崩壊論と同一基盤に立っていることを暴露するものである。いうまでもなく、ここでの問題は、かかる関係を相対的、一時的なものとみるか、絶対的固定的なものと把えるのかということである。

中核派の「現代帝国主義論」の核心とは、次のようなものであるらしい。

「相対的安定を強いられたとはいえ、米帝の力量はなお圧倒的で不可逆的な格差をもっており、他のどの帝国主義といえども、この〝最後の帝国主義〟なる米帝にとってかわり、世界支配＝国際帝国主義の統一性保持の責任を引受けることは不可能である。そして、そのなかで米帝が倒れ、ドルが倒れることは各国帝国主義にとっても最悪の結果を結果するであろう。この点に帝国主義諸国間の経済的争闘戦が極端に激化しつつも、危機を深める米帝を支え、ドル体制崩壊を回避するための〝ビホウ的〟協調を、諸国、各国帝国主義が米帝と取り結ばざるを得ない歴史的根拠があるのだ」。国際帝国主義の統一性に、「暫定的」という形容詞をつけたり、各国帝国主義の米帝への協調を「当面」と限定したり、まことに涙ぐましい努力を払っていても、この関係の固定化の枠内から階級闘争の展望を見出し、「戦略的」展望を打ち立てる限りにおいて、第一インターと同じ誤謬を今、中核派は歩んでおり、彼らが具体的に反発する代々木と、実は似ているのだ。

第二次帝国主義戦争以降の米帝の世界支配は「もし純粋に経済的見地をとり、〝純粋〟の抽象を解するなら、いいうるすべてのことは、要するに発展は独占にむかっており、したがって一つの全世界的トラストにむかっている、という命題に帰着するであろう。これは争う余地がない」（レーニン「帝国主義論」）ということであった。しかし、こんなことをいっても「まったく無内容」なのである。「帝国主義の不均等発展という、それ自体あたりまえな法則」（前進・三九一号）とは、以上のことを認めた上で次のように受けとめられなければならない。「もし二十世紀の初めにあたる歴史的に具体的な時代としての金融資本の時代の『経済的』諸条件について語るなら『超帝国主義』という死んだ抽象（これはもっぱら現存する諸矛盾の根拠から人々の注意をそらせようとする反動的な目的に役だっている）にたいする最良の答は、この抽象に現代の世界経済の具体的な経済的現実を対置することである。超帝国主義についてのカウツキー【中核派と読め！】の内容のないオシャベリは、とりわけ、金融資本の支配が実際には世界経済の内部の不均等性と矛盾を激化させているのに、それらを弱めるかのようにいう、根本的にまちがっている。そして帝国主義の弁護者たち【勿論スターリニストもこの中に入る】に力ぞえをする思想を、はげますものである」と。「戦後国際帝国主義の一般的特質」が、帝国主義のこの本質をも変えたというのなら積極的にその根拠を示すことが、[illegible]をもたらすであろう。ともあれ、中核派がホブソンの概念であり、カウツキーの「超帝国主義」と同類であることをお断りしながら[illegible]してやらなければならない事、彼らの限界の根は深いのである。

従って、（4）（5）は、既にASPACシリーズで明らかにして来たように、決して絶対的・固定的なものではなく、かつ、日本資本主義の帝国主義としての発展を規定するものでもなく、ただ日米両帝国主義の力関係と対外条件を指し示すメルクマールに過ぎないのだ。なお、もう少し、付け加えれば、「〝最後の帝国主義〟たる米帝」なる把握は、レーニンの「資本主義の最高段階としての帝国主義」又は「死滅しつつある資本主義」をもじったのであろうけれども、これは意味を全く取り違えたものであることを指摘しておかなければならない。レーニンがいっていることは、帝国主義段階の特徴であって、具体的な一国を指したものではない。「革命の主体を忘れない」中核派にあっては、どこか帝国主義段階において最後に社会主義に到達するかは、帝国主義総体の危機を客観的条件としながらも、ひとえに主体の問題であり、これとて、世界、一国同時革命の戦略にあっては殆んど無意味であり、それではなく、一国、段階、総和革命を積極的に承認するならば、「反スタ」の看板にそぐわないものである。

支配形態と権力を

混同する中核派

第二に、（4）（5）の把握の問題は（1）（2）（3）として権力問題における修正主義と一体不可分なのである。

（1）日本型社民（戦闘的労働運動）（2）自衛隊における弱体

（3）これらを包括した「戦後憲法体制」など、支配形態やその体制は、階級闘争の産物であり、外化であって、これらに目を奪われこの支配形態と「軍国化」「核武装化」という政治過程との矛盾に革命の展望を託することは、自己をブルジョワ政治におとしこむことに等しい。

（1）、（2）、（3）の支配形態は、次のような経済的土台に基づく階級闘争の外化である。

第二次帝国主義戦争と処理過程を通して、巨大な生産力を背景とした米帝の日帝に対する再分割が行われた。この条件下で帝国主義の不均等発展が、日帝の資本の蓄積─米帝＝提携関係として表現され、この土台に照応し、階級闘争が不断に激化した。この外化された支配形態こそ「戦後憲法体制」である。市場再分割戦と階級闘争のこのような局面が、帝国主義の国際的相互関係においては、巨大な生産力を基礎に世界分割と国際反革命を統一した、米帝への相対的劣位な国際関係として、外化したのであった。（日米安保と九条の矛盾の中の日米安保）

第三にこの前提に立った上で、現在の反戦闘争と個別闘争の激化から、権力への国民的合意の不可能性を求めることを批判せねばならない。そして、社民＝大衆の日和見主義との「革命的統一戦線」の中に、プロレタリア統一戦線を解消させてしまう自然成長革命論を導くことを批判せねばならない。

中核派は、過渡期世界の革命的勝利に挑戦し、金融的危機＝社会ファシズム論─人民戦線論を以て国際プロレタリアートの媒体に甘んじたコミンテルンの歴史的教訓なんら学び得ない。

中核派は、ヘゲモニー抗争が国内の革命的契機の外化であり、なし崩し市場再分割と低コスト戦がその土台であり、それは、革命的階級を革命的危機に煮つめるとともに、その外化としてアジア─中国への日帝軍隊の本格的軍事行動と米帝との軍事的緊張へ同時に煮つまり、バラバラに存在している軍隊・排外主義的社民・小ブルの反資本主義運動が、外的危機に促迫され、一挙に結合しファシズムとして革命の前に立ちはだかる、こうした飛躍が、70年安保─70年代階級闘争へ向けた現在の政治過程に既に内包されていることを否定する。

日米同盟の運命共同体的性格とその矛盾及び日帝権力の弱さと経済的弱さに「革命の現実性」を求める中核派は、結局ブルジョワ主流＝親米・反革命（反共）／ブルジョワ反主流＝反米・世界分割（ナショナリズム）を区別し、主流の政治路線を反主流と結合して阻止し、中立帝国主義化＝二段階戦略→体制間矛盾→一国社会主義が成るとするスターリニストと同じ範疇の下に住んでいるのである。

全学連の革命的再編をかちとり

ASPAC─七〇年安保へ

われわれは七〇年代階級闘争を全ての帝国主義が互いに世界再分割戦争に突入し、労働者国家への反革命戦争をプロレタリアートの解体＝ファシズムをもってやらねばならぬという状況下で権力の矛盾が煮つめられ、爆発する地点におけるソビエト建設に向けたプロレタリア統一戦線の下に闘わねばならない。

それは反戦闘争─個別闘争の質の、外化としての侵略・反革命に対し、一貫してその粉砕─日帝打倒を政治路線とし、ファシズム形成への結合の軸、軍隊解体を戦略目標とし中央権力闘争─全国（基地）闘争、街頭武装闘争─生産点ストの指導の下に地区反戦・全学連等における一切の小ブル民主主義的党派との政治統一戦線を組み、個々の地区反戦・反戦青年委のヘゲモニー兼備（＝ソビエトの萌芽）プロレタリアートを小ブル・農民に対する指導的関係として高め上げることである。これにより、日帝ブルジョアジーは小ブルをファシズムに組織し得ぬまま、二重権力をつくりだす。このプロレタリア革命の最終的勝利は、米帝内の国際的階級決戦が、それまでに日帝国主義の侵略＝反革命粉砕─日帝帝国主義打倒の政治闘争に導かれて小ブル民主々義の大衆の中で、プロレタリア権力を樹立して闘われ、日帝権力との衝突及び国際反革命（含日米独占との闘い）に国民統合力などまま追いこまれ、二重権力を形成し、国内における矛盾総統と密集した反革命及び新たなファシズムの前衛を粉砕し尽す結果である。

この具体的政治過程そのものの可否が問題なのではない。問題は第一にプロレタリア統一戦線をこのような世界＝一国同時革命のヘゲモニーとして形成せねばならぬこと。第二に革命的暴力＝革命的危機─二重権力の全過程が「日米の権力の矛盾」を日帝権力の暴力的解体─プロレタリア独裁によって極限に拡張させ、米国内の革命的危機を増大させ国際統一を媒介に米国内革命的反帝統一と結合する条件を形成する一方、「日米の権力の矛盾」をつくと称して、[illegible] この帝国主義軍隊の、イデオロギー的・政治的・組織的・軍事的解体へ向けて、鋭く突き出されなくてはならない。

我々は、この革命的反戦闘争の闘争戦術として、中央権力中枢（外務省、防衛庁）への実力闘争と、全国的な基地闘争を提出しなければならない。全国的な基地闘争は、政治的位置付けとしては、日帝の軍事力強化へ対決する方向へ、従って、中央権力中枢への実力闘争への一過程として位置付ける。

7／27ASPAC粉砕・三木訪米阻止、中央実力闘争はこの様な位置付けの下に闘い抜かれるであろう。

このASPAC闘争を期して、全学連の七〇年安保─七〇年代階級闘争の闘いの更なる前進が開始される。まさにこの闘争を以上の位置づけ─方針で闘い抜くことこそ、全学連を唯一、全学連たらしめるものである。中核、革マル、民青「全学連」は、いかに現実的な運動方針・闘争形態の違いを強調しようとも、本質においては同じ帝国主義の侵略・反革命に対する敗北戦線である。われわれ全学連にとっては、解体、吸収の対象の以外の何ものでもない。われわれは成田、沖縄、10・21国際反戦スト、日米経済合同委、米帝の佐藤訪米阻止を闘いぬく過程で、プロレタリア統一戦線の一翼を担う全学連の強化拡大を押し進めるであろう。